

出羽地区コミュニティ推進協議会主催

平成25年度 歴史散策ウォーキング

「赤山街道と岩槻古道を歩く」

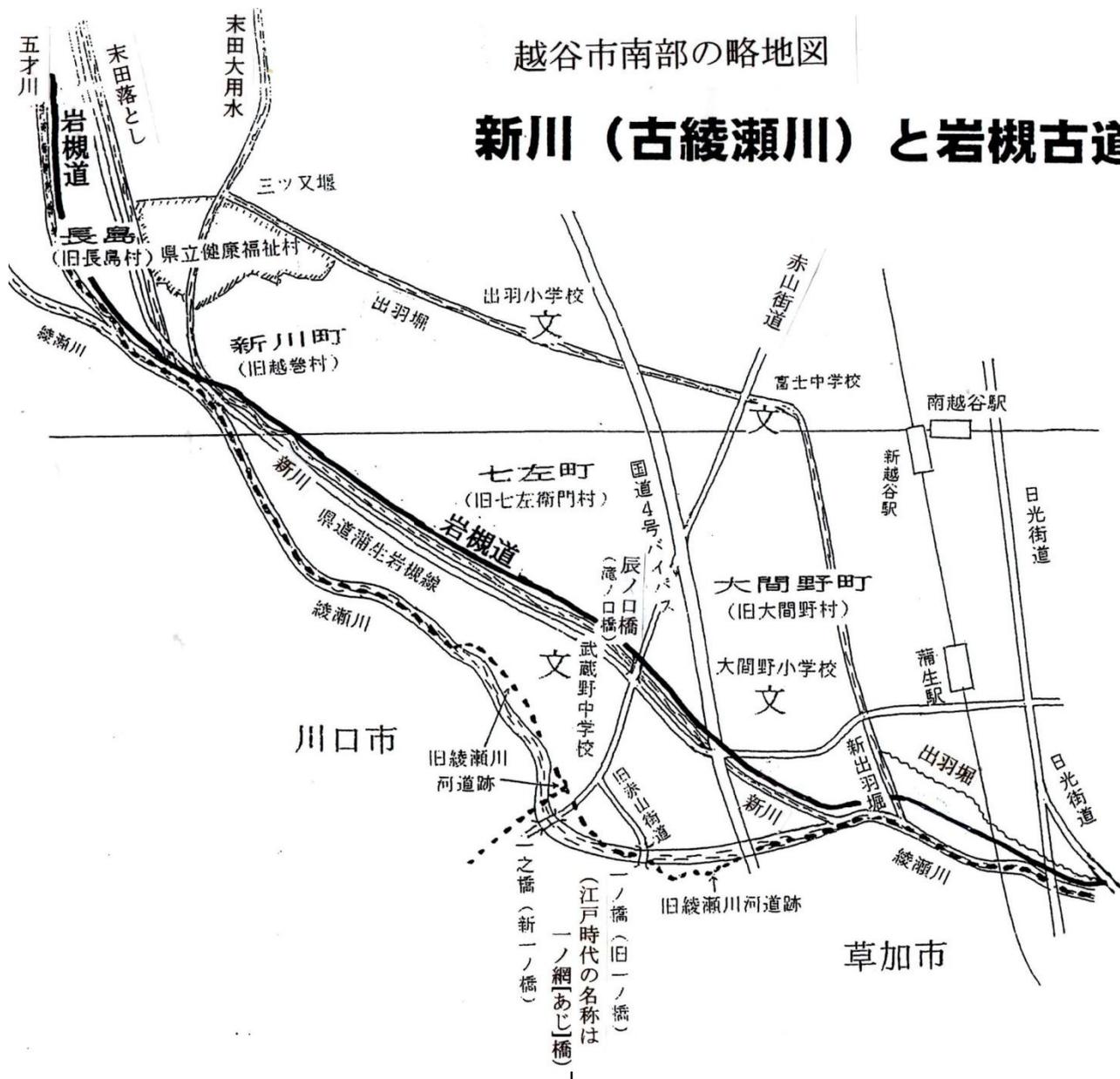
平成25年9月29日(日)

今までの取り組み

- | | | |
|--------|-----------|---|
| 平成20年度 | 9月28日(日) | 出羽地区センター→西福院→中新田の稻荷神社→大雄山碑石→満蔵院→上組稻荷神社→観照院→出羽地区センター |
| 平成21年度 | 10月4日(日) | 出羽堀と岩槻古道散策 |
| 平成22年度 | 9月19日(日) | 宮本町・神明町方面の散策 |
| 平成23年度 | 10月30日(日) | 新川町方面の散策、新川は古綾瀬川だった |
| 平成24年度 | 9月30日(日) | 出羽地区南部方面散策 |

越谷市南部の略地図

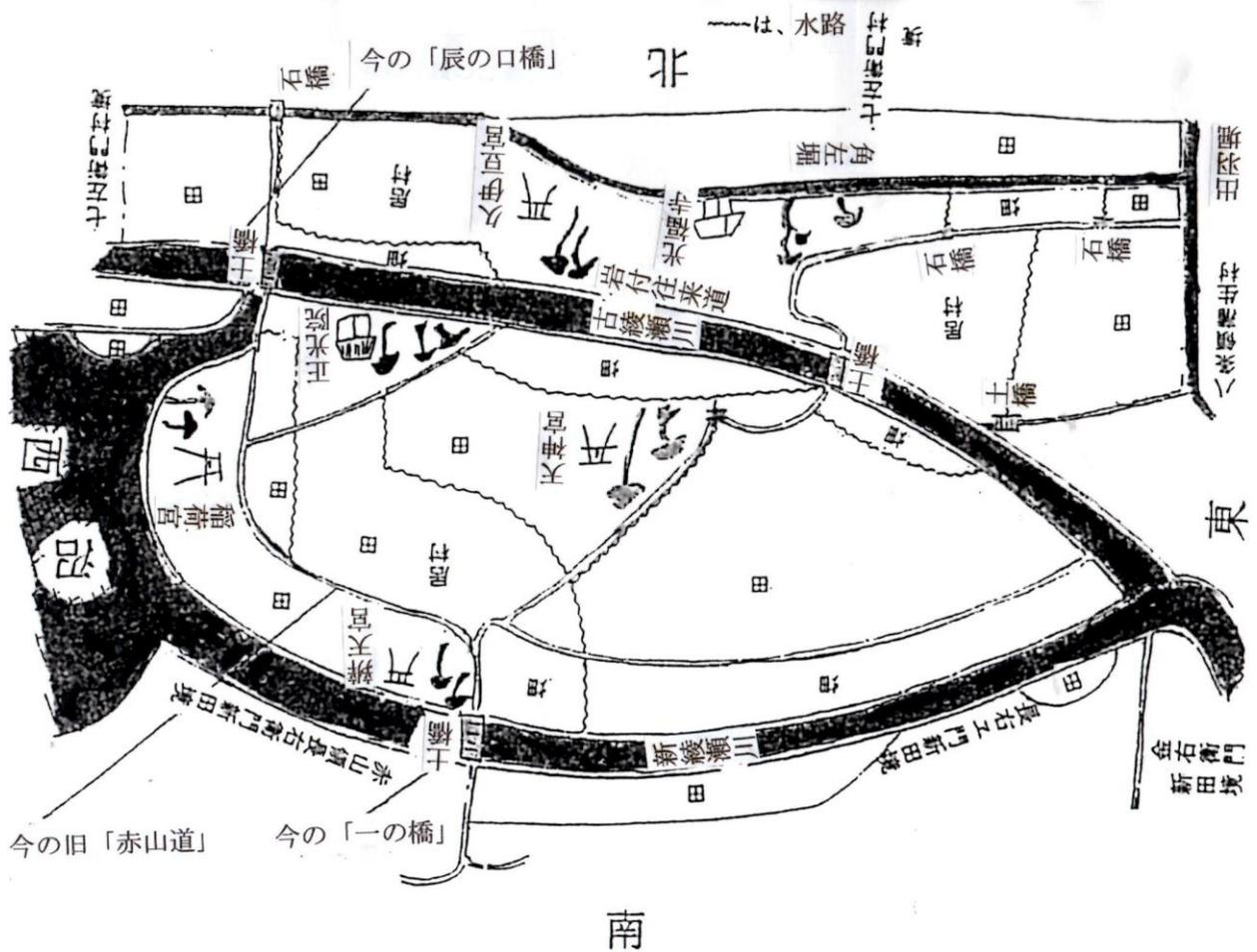
新川(古綾瀬川)と岩槻古道



一ノ橋(旧一ノ橋)
(江戸時代の名称は
一ノ網「あじ」橋)

天保11年の大間野村絵地図（大間野村中村家所蔵）

現在の「武蔵野線」以南、「新一の橋」以東、新川（古綾瀬川）と綾瀬川（新綾瀬川）の合流点以西



1. 出羽堀「出羽堀は、江戸時代初めに会田出羽が作った堀で、出羽の地名のおこり」

会田出羽介正之（でわのすけまさゆき）が越ヶ谷宿の御殿町に住んで、この堀を作り、出羽堀と唱えたとされる。

江戸時代以前のこと、現在の出羽地区は沼沢地であった。その沼沢地の開発を手掛けたのが会田出羽資清（すけきよ）である。その子、資久（すけひさ）は、現在の御殿町及びその南隣の越ヶ谷五丁目にかけての広大な敷地をもっていたが、その敷地の一部である現在の御殿町あたりを御殿の建設のために徳川家康に提供している。さらに、資久の養子に、後の会田七左衛門政重（まさしげ）がいる。会田七左衛門家の初代となる。会田出羽家の分家といえる。七左衛門は、現在の出羽地区を開墾し、七左衛門新田を成立させる。後に七左衛門村と称する。七左衛門村からは、さらに後に越巻村と大間野村を分村させる。

出羽堀の流路は、現在の健康福祉村の「ときめき元気館」の北方にある三ツ又堰（みつまたぜき）で末田用水から分かれ、西流し、出羽小学校や三ツ谷（みつや）稲荷、三ツ谷地蔵のそばを通り、富士中学校そばから南流し、途中の現在の西浦橋北方あたりから西流し（現在、出羽堀は南流して綾瀬川に流れ注ぐ。この新しくできた流路を「新出羽堀」という）、蒲生一丁目の久伊豆神社そばや蒲生橋（古くは出羽橋）、蒲生の一里塚のある愛宕神社、そして綾瀬川に流れ注いでいた。

2. 三ツ谷の稻荷神社「三ツ谷集落の鎮守様、三ツ谷は谷中一丁目あたり、「三ツ谷」は『三ツ新田の谷中』の意味)」

庚申塔、馬頭観音文字塔と力石がここにある。三ツ谷とは、現在の谷中一丁目あたりにあった集落。三ツ谷は、古くは越ヶ谷宿に属し、後に谷中村に含まれても「三ツ新田村」と村を付けていたようである（「越ヶ谷領、三ツ新田村」と刻まれた石仏を加藤が富士中学校そばの出羽堀で発見、向かって右図参照）。これは、谷中は四丁野村が原村、それに対して「三ツ新田」は越ヶ谷宿出身者たち、そのために谷中村に属していても完全には溶け込まなかったため「村」を付けていたのであろう。「新編武蔵風土記稿」には「三津新田」と記されている。

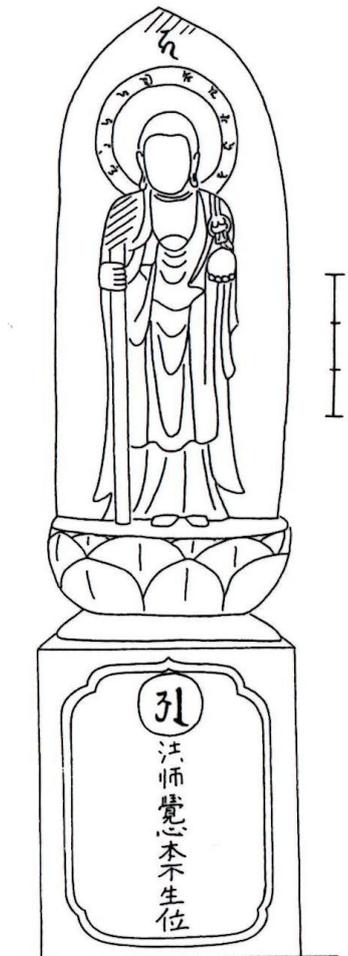


三ツ新田村
越ヶ谷郷
出羽堀の富士中学校近くのポンプ場そば

3. 三ツ谷地蔵「地元の信仰と三ツ谷地蔵伝説があった」

覚心法師が享保6年、1721年に造立した石仏。地蔵菩薩像の上に地蔵を意味する梵字「カ」が刻まれている。そばには、赤山街道沿いに流れる横堀に架かる三ツ谷橋があった。以下は「越谷ふるさと散歩・下」より引用。

地元ではこれを三ツ谷地蔵と呼び、娘が嫁ぐとき、赤子が生まれたとき、あるいは子供の帯解き祝いには参詣を欠かさなかったという。伝えに谷中村三ツ谷集落の旧家西川家に覚心法師という僧がいたが、この僧は諸国を遊説中の元文2年（1737）に悪人に襲われて死去した。西川家ではこの僧の供養塔墓石を屋敷内に建立したが、以来不幸が重なったため赤山街道沿いの現在地に移したといわれる。



出羽堀と赤山街道交差点

『三ツ谷地蔵』の伝説
越谷より安行、鳩ヶ谷に至る赤山街道を約二キロ西へ行った所に三ツ谷集落（現在の谷中一丁目あたり）があり、街道を折れて出羽小中学校「場所、現在の出羽小中学校。当時は、小中学校が同敷地にあった。」に行く十字路にお地蔵様があり、その名を三谷地蔵と言ひ、部落の人の信仰篤く、「娘が」嫁ぐ時、赤子の産まれた時、あるいは「子供の」帯とけの時など参詣が行われている。地蔵様は近くの西川家「七左町二一三三」の所有である。これについては次のようないわれがある。
このお坊さんは若い頃から山谷を越え、町から村へと旅を続けることが大好きであった。そして、その道中哀れな人や困った人に出会うと心からの同情を寄せ、また親身になって相談にのり、いろいろ指導されていた。また反面、悪人がいれば強く雄々しい態度で自らいましていた。ある時には村へさしかかった道中で子供を多数かかえた貧しい親子に身の上を聞くと、あまりにも可哀そうなので子供を引き取り、親には職場を与え旅を続けていった。こういった行いをすることが好きであったのである。しかし法師は元文（原文では「天文」と誤字）二年（一七三七）今から二百二十三年前、悪人にねらわれて倒れたのである。そこで西川家では法師を祀って家の南西にあたる屋敷近くの所にお地蔵様を建てた。ところがどうしたことか、それからというもの西川家には運の悪いことばかり続いて、家中暗くなってしまう。そこで地主に見てもらおうと、方面が悪いとのことだったので、西川家の耕地の一番東口にあたる三谷橋（みつやばし）の人通りの多い十字路に移し祀ったので、その後は、みんな幸福に暮らすようになったとのことである。願いごとを頼めば何でもかなえてくれると伝えられ三谷地蔵として多くの人々に親しまれて（後略）

「越谷市の史蹟と伝説」（越谷市教育委員会）より

※ここに出てくる法師とは、この石仏を造立した覚心法師であろう。覚心は地元の西川家とは縁が深く、西川家の出自であろうと推定できる。

4. 赤山街道「越ヶ谷から川口にある赤山陣屋に通じる越ヶ谷口の赤山街道、その他にも3つある」



5. ゆずり橋「角左堀（かくざぼり）に架かっていた橋、現在の山田うどん七左店の南側」（赤山街道の下に横切って流れる堀が角左堀、以下は「中川水系総合調査報告書2」より引用。）

この「ゆずり橋」というのは、村中の悪霊を他へゆずり払う場所という意味だという。現在でもこの出羽七左衛門地区には、百万遍が行われている。神主に切ってもらった御幣と寺で受けた木札を持って子供たちが、数珠玉の直径10センチメートル、長さ18尺（5.4メートル）もの大数珠を持って、笛や太鼓に合わせて「ナイダー、ナイダー」と唱えながら、村中の家一軒一軒を廻ってお祓いをし、戸袋にさきほどの木札を張り付けて歩くのである。四谷—上組—根郷—中組と回り、最後に「ゆずり橋」のところに御幣を納めるのである。唱え言葉の「ナイダー、ナイダー」は、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」のなまったものと言われている。

6. 「辰の口」の二つの伝説「水が竜のように流れ落ちた穴、竜が地中から天に舞い上がった穴」

新川の川底から突然竜が天に舞い上がり、その跡に大きな穴があいたので辰の口と呼ばれた。もう一つは、この穴に赤山街道沿いに南流してきた水路の水が滝のように水が落ちていて、龍の口のように見えるので辰の口と呼ばれた。

江戸時代、岩槻道と赤山道が交差する地点に新川（古綾瀬川とも呼ばれた）を跨ぐ土橋「辰の口橋」が架けられていた。

この「辰（竜）の口橋」には二つの伝説がある。一つは、赤山街道沿いの水路の水を新川の下をくぐって対岸に流すために作った穴に、水路の水が吸い込まれるように激しく落ち込んでいて、それが辰（竜）の口のようにだったと言われる。もう一つは、川底の下をくぐっている大きな穴は、竜が川底の地中から、激しく水を巻き上げ、空に舞い上がったときにくぐってできた穴の跡であるという言い伝えである。

耕地整理が行われる昭和30年代初頭までは、北から流れてきた赤山街道沿いの用水路が、新川の川底の下をくぐるように流されて（伏せ越し）いたが、新川の水面は、赤山街道沿いの用水路の水面よりもかなり低かったため、渦を巻くように激しく流れ込んでいたためである。そして新川の下をくぐり抜けた水は、対岸の高い土手道となっていた赤山街道の西側の地点から吹き出すようにして出て、「生け簀（ず）」に流れ込み、その水は、当時あったすぐそばの「大沼」に落とされたり、赤山街道を越えて、赤山街道の東側の、現在の大間野町4丁目や5丁目に用水として流されていた。

7. 旧赤山街道「これが江戸時代からの本来の赤山街道、現在の新一の橋を渡る道は新しい道である」

昭和40年頃まで、越ヶ谷駅から川口駅までバスが通っていた。現在は、赤山街道は新一の橋を渡る直線の道となっているが、昔は近くにある大沼のために赤山街道がここで迂回していたのである。

8. 三社神社の一つ弁天社の発祥地「三社神社の一つ、弁天社が旧赤山街道沿いにあった」

江戸時代初期の寛永年間頃、東組（ひがしぐみ、現在の大間野町二丁目あたり）には久伊豆社、上手組（わてぐみ）と向居組（むかいぐみ）には稲荷社、一ノ網組（いちのあじぐみ）には、弁天社（後に、巖島明神と改称）が祀られていた。その後、慶応4年（1868）3月の神仏分離令により、久伊豆社と巖島明神を稲荷社に併合し、「三社大神社」と改称して、現在の国道4号線（草加バイパス）沿いの大間野に三社神社（この地には元は天神社が祀られていた）として祀られるようになったという。

東組は現在の大間野町二丁目あたりに相当し、久伊豆社は、光福寺の裏の大間野町二二〇〇のかつての太田家の跡地、現在、「パルコート越谷」のマンションの地にあった。

上手組は現在の大間野町三丁目あたり、向居組は現在の大間野町四丁目あたりで、稲荷社は大間野四の一五二の二の町田家にあった。現在でもここに稲荷社が祀られている。

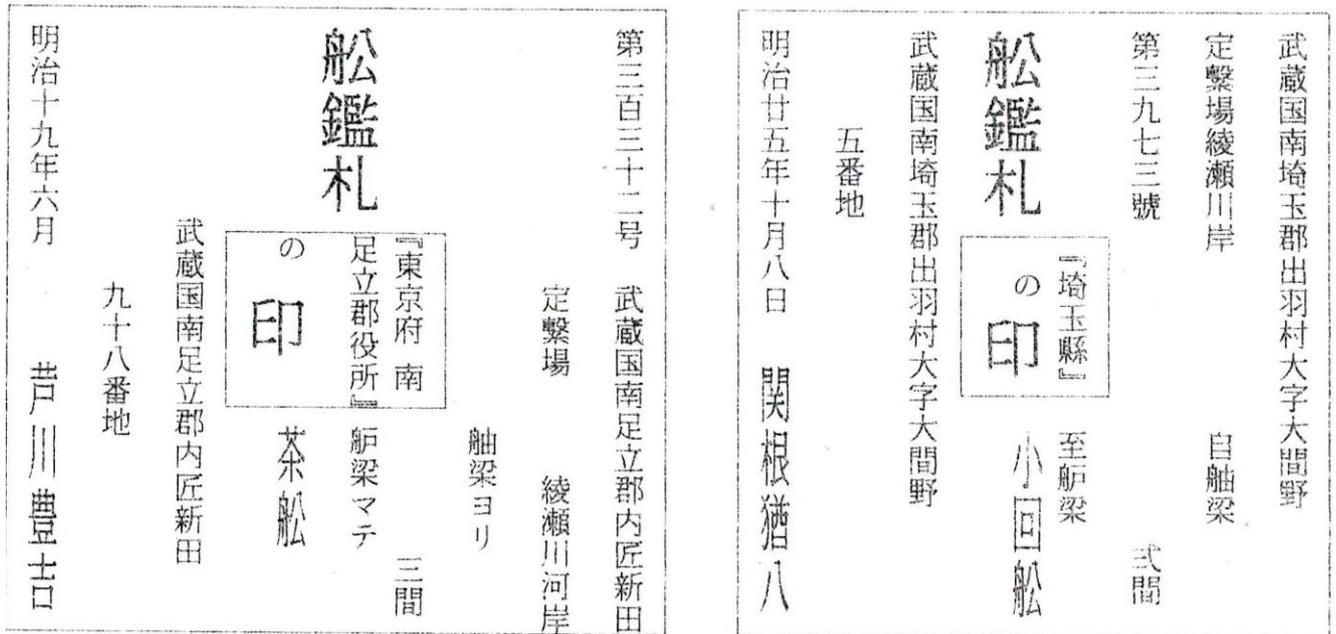
一のあじ組（現在は「一の橋組」、一の橋は江戸時代に「一ノあじ橋」と呼んでいた）は、現在の大間野町五丁目あたりで、弁天社は大間野町五の二三五の金子家にあった。現在でもここに祀られている。

「天保11年の大間野村絵地図」には、稲荷社、弁天社、久伊豆社、天神社が描かれている。

9. よしずや河岸と弁天藤「よしずや河岸は綾瀬川の河岸場として栄え、近藤勇も愛でた藤があった」

綾瀬川周辺の沼地や湿地を利用して、ヨシズやレンコン、クワイなどが生産され、赤山街道沿道の二つの河岸場である「二つ橋河岸」と「よしずや河岸」（「一のあじ橋」そばの関根家）から出荷していた。

近藤勇は、越ヶ谷から板橋への護送の途中、赤山街道の綾瀬川に架かる一の橋（現在の旧・一の橋、当時は「一ノあじ橋」と呼ばれた）のたもとの「よしずや河岸」の茶屋（関根氏）で休息し（四月五日とされる）、弁天藤（現在は、出羽公園に移植）を見ながら、「綾なる流れに 藤の花匂う わが生涯に悔いなし」との辞世の句を詠んだとの言い伝えがあるが、確証はない。実際には、板橋で偽名がばれたあとに辞世の漢詩を詠んでいる（四月二十五日）。



上記の船鑑札2枚は、大間野町五丁目の「よしずや」(関根家) 宅に保管されているものである。

この中に出てくる「関根猶八」は、現当主関根弘良の曾祖父のさらに上の父にあたる。「南足立郡内匠(たくみ)新田」とあるのは、綾瀬川沿いの現在の足立区南花畑(はなはた)三丁目(旧、内匠本町)あたりである。「内匠新田九十八番地」は、現在の南花畑三丁目三七番地に相当する。かつてはここに芦川姓が二軒あった。

10. 大間野の旧綾瀬川跡「大間野五丁目のうち、綾瀬川の南側の地域」

綾瀬川がかつて流れていた流路が、現在、越谷市と草加市の市境になっている。

昭和19年12月、B29が撃墜され、綾瀬川を挟んで、草加市北部(現在の長栄町)に本体が落下し、尾翼が越谷市の南部(大間野)に落下した。

11. 縄文時代の丸木舟の発見地「大昔の丸木舟が綾瀬川の中から発見された」

以下の文章は、草加ペンクラブの染谷洸氏と松本孝氏によるものです。

草加市立歴史民俗資料館の展示室に「縄文時代の丸木舟」が透明のケースの中に納められている。

ヘサキとトモがほぼ原形をとどめており、長さ606センチ、幅67センチで、かつおぶしの形をしている。

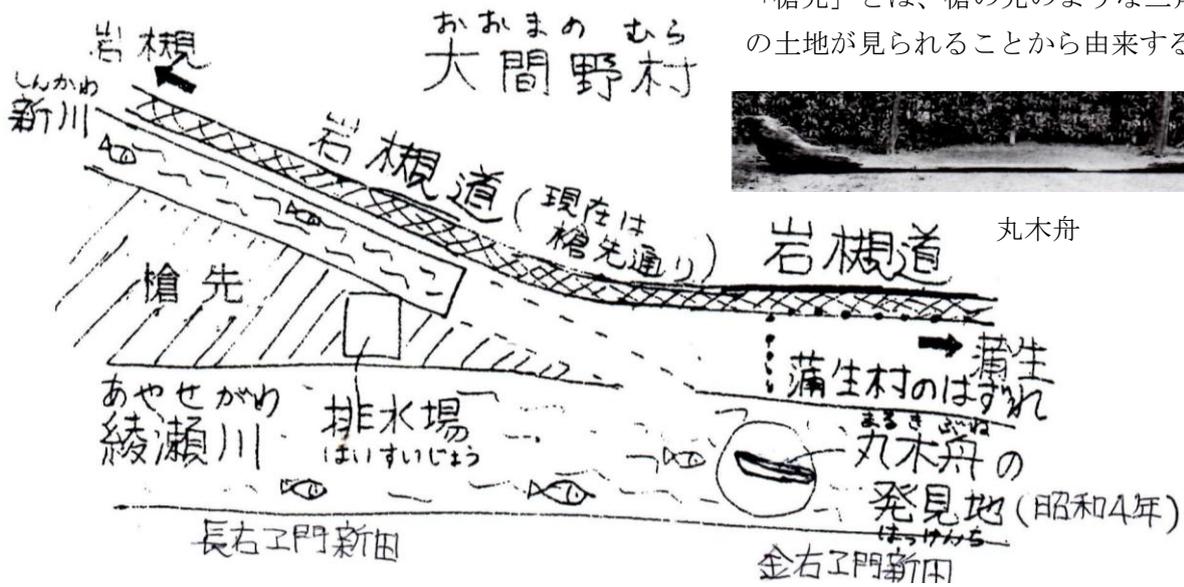
昭和4年の春、綾瀬川の川底さらいの時、金明町地内から発見された。平成13年に科学的分析を行った結果、約5,300年前の縄文時代前期のものであることが判明した。用材はカヤである。

この丸木舟が発見された時のことを、田中捷一郎氏が、昭和57年11月20日の「広報そうか」で語っている言葉が興味深い。当時、教員であった氏に、綾瀬川の改修工事に携わっている現場監督と知り合いの同僚がいて、その同僚から古代の丸木舟らしいものが発見されたという情報を得た。学生時代に丸木舟のことを学んだことのある氏は、ひょっとしたらとを感じるものがあり、急ぎ現場に走ってみると、綾瀬川の川辺に丸木舟が引き揚げられていた。

後日談によると、舟は川のほぼ中央にあったため、引き揚げの際に、どちらの岸へ揚げるかが問題となったが、作業がしやすいという理由で新田側に引き揚げた。反対側に引き揚げていたら、この古代の貴重な資料の、今は越谷市のものになっていただろう、と言う。

※この丸木舟は、新川と綾瀬川との合流地点で発見、新川から流れてきたのかもしれない。(加藤)

1 2. 新川と槍先（やりちやき）通り「新川はかつての古綾瀬川、槍先通りはかつての岩槻道」



「槍先」とは、槍の先のような三角形の土地が見られることから由来する



丸木舟

1 3. 大間野村名主の中村家の長屋門「江戸時代の名主の家には長屋門が見られた」

江戸時代、代々世襲の名主の住まいには、家柄の高さを示す長屋門が必ず見られた。現在の大間野中村家の長屋門は、明治19年に再建されたものである。母屋（主家） 齒大正3年に建てられた。

なお、市内で江戸時代の長屋門が残る家は、長島村名主の内山家の長屋門である。内山家の古文書の調査によると、寛政元年（1789年）に母屋が焼失している。その時に長屋門も焼失したと仮定すると、長屋門も寛政年間に建てられたものと思われる（加藤）。

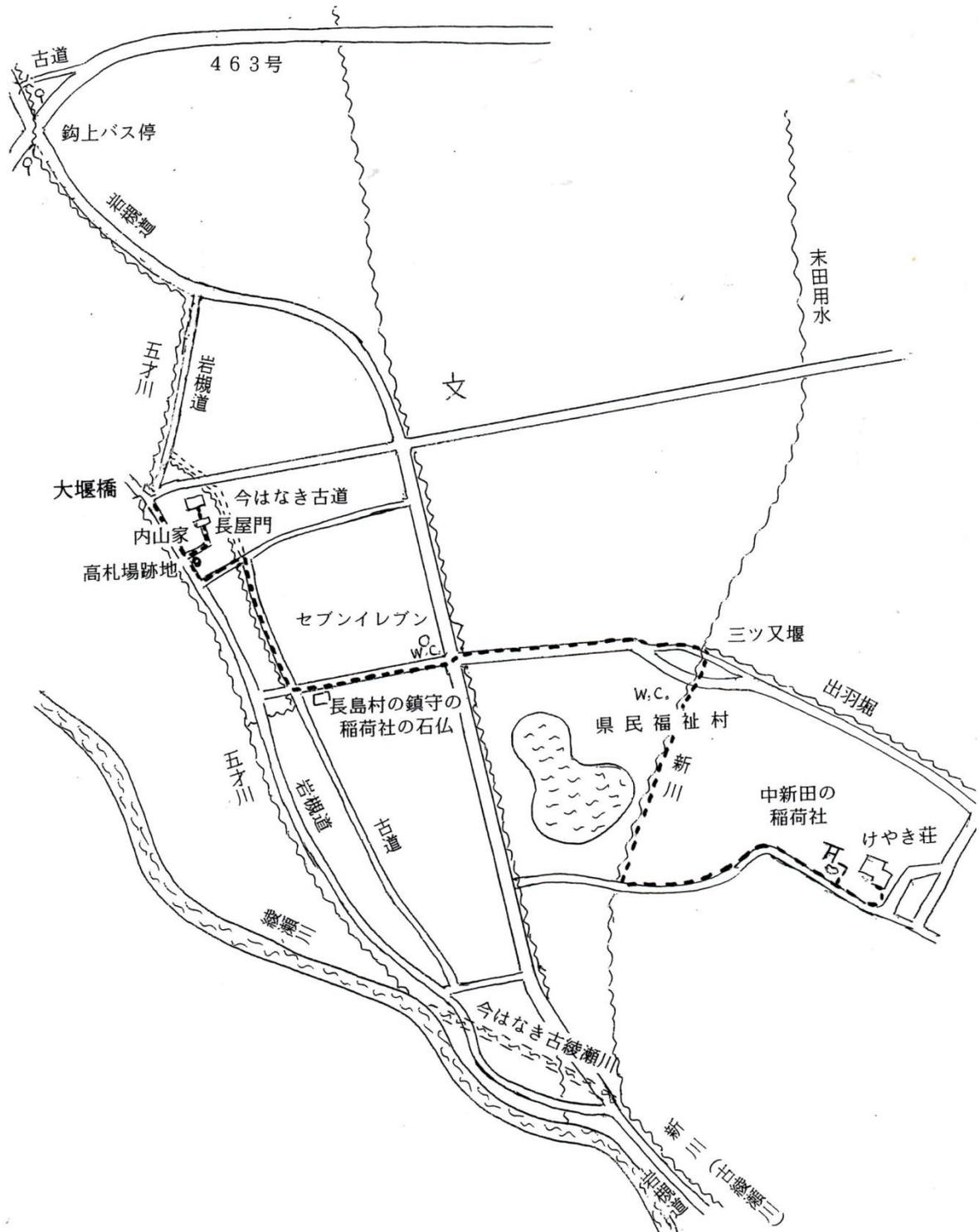
1 4. 新川と岩槻道「江戸中期に改称された新川は、それまでは古綾瀬川と呼ばれた。」

岩槻道は新川（古綾瀬川）の左岸（北側）にあった。」

江戸時代の古文書には、現在の新川は古綾瀬川と書かれ、その左岸（北側）に岩槻道があったことがわかる。現在の綾瀬川は新綾瀬川と呼ばれていた。

宝暦十一年（一七六一）の長島村内山家所蔵の新川筋絵地図によると、新川は、現在の県民健康福祉村の北隣にある三ツ又堰より、この新川が綾瀬川に注ぐ綾瀬川の落とし口までを指している。この古絵図によって新川が江戸中期の宝暦十一年には既に完成していたことが分かる（加藤）。





15. 出羽公園と弁天藤「綾瀬川のよしず河岸にあった弁天藤が出羽公園に移された」

江戸時代に関根家が経営する綾瀬川沿いの「よしずや河岸（かし）」にあった藤（「弁天藤」と呼ばれた）が出羽公園に移転されたもの。幕末には、近藤勇が4月初旬、この藤を見て詠んだとされる最後の辞世の句「綾なる流れに 藤の花匂う わが生涯に 悔いなし」としても知られている。

「弁天藤」のいわれは、近くに弁天を祀る祠（「一ノあじ組」の鎮守）があったことから名付けられたのであろう（加藤）。

16. 「かくざ」(かつては道路が直角に曲がっていて「かくざ」と呼ばれた)

観照院前の道路が、かつては現在のように曲がらずに直線のまま南にメートル 110 メートル進み、その地点(七左町七の一八四の野口家の南西、現、武蔵線そば)が丁字路(今はない)となり、そこに安置されていたのが、現在観照院出口にある「道標付き不動明王像」である。南東向きに置かれていた。



赤山街道のゆずり橋や大間野小学校の北側道路に流れる「角左堀」(かくざぼり)の名称の由来は、この「かくざ」からきているのかもしれない。しかし、「角左」は「角左衛門」を縮めた名称との考えも捨てきれない。(加藤)

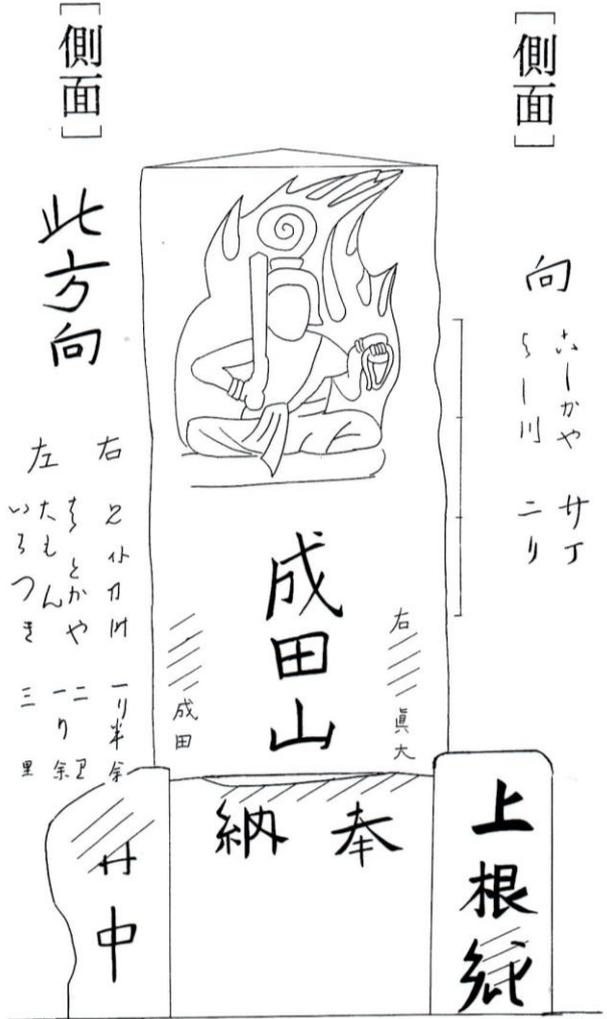
道標付き不動明王像(『越谷市金石資料集』不動一六番)所在地 七左衛門・観照院参道入口
石塔型式 頭部山状角型(北東向き・高さは中)
年号 文久四年(一八六四)

〔左側面〕
文久四〇次甲子正月
向 よし川 二り
〔正面〕
右 真大
(不動明王像) 成田山
成田
〔右側面〕
右 一り半余
左 大もん 三り余里
はとかや 二り余里
いわつき 三り余里

成田 真大
成田 一り半余
成田 二り余里
成田 三り余里

納奉 講中
上根郷 中

埼玉郡七佐衛門村 先達 源明院 八郎左エ門
〔(興か)右衛門 台石〕 上根郷



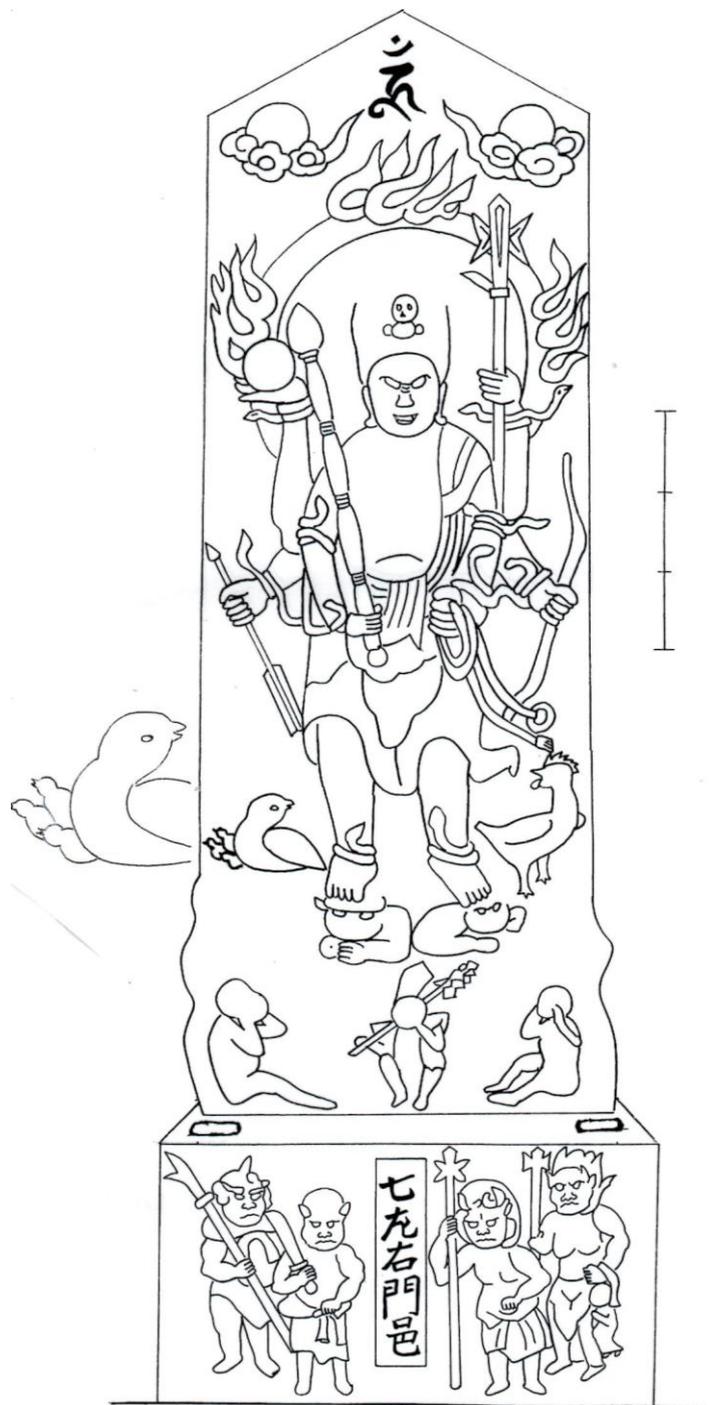
17. 観照院の庚申塔（こうしんとう）「他にはなかなか見られない出来映えの庚申塔である」

庚申信仰は、人間の体の中に潜んでいる三尸（さんし・三匹の尸虫）が、六十日に一度やってくる干支（えと）の庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天の神に暴く。するとその報告をもとに判断して、それに応じて命を縮めて若死にさせたりする。それゆえ六十日ごとにくる庚申の日の夜は三尸が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならない（後には、三尸が鬼の姿に変わって、病気の息を吹きかける、となる）という。そこで、庚申講の仲間達（男性に限る）が一堂に会し、徹夜して過ごし、鶏の鳴き声が聞こえる頃に解散するという行事が行われる。集まった男性たちの雑談を兼ねた信仰行事である。その行事の記念として建立された石塔が庚申塔である。

庚申塔の青面金剛の上には、太陽や月が描かれ、青面金剛の脇には二鶏（雌雄）が描かれていることがある。足元には鬼を踏み潰し、その下には見ざる、聞かざる、言わざるの三猿が描かれている。

右図は、観照院の宝暦十四年（一七六四）の庚申塔である。

最上部には青面金剛を表す梵字「ウーン」が刻まれている。青面金剛の頭光は火炎の輪光背である。頭髪にはドクロが描かれている。腕や足には蛇が絡みついているのが珍しい。青面金剛の周囲には、三猿（見ざる・聞かざる・言わざる）や二鶏（雌雄）、二鬼が見られる。二鶏の内の雌鳥（めんどり）には、三匹の子を連れている。さらに四夜叉を伴っているのは珍しく、筋肉が隆々と表現されている。この庚申塔は台石の両側面をみると男女が協力して奉納したことがわかる。



観照院の庚申塔

に之区と懸入しいいから夏にかけてが見えます。



赤山街道

赤山鎮赤山(現在の川口市赤山)にあった関東伊奈氏の赤山陣屋に続く道として賑わったことから名づけられた。

(市指定文化財)会田七左衛門



元和から144)にかけて瀬川流域の藩開発した会田の遺徳を偲びに奉納しました。作者は、その性格的です。



堀
代初期に越ヶ谷領を
会田出羽家(現在の
あった)の名前から
と推定されている。

1 出羽堀

2 三ツ谷稲荷

3 三ツ谷地蔵

17 観照院の庚申塔

16 かくざ

15 出羽公園の弁天藤

4 赤山街道

5 ゆずり橋

辰之口橋
ここには元は新川にかかる橋があった。「辰之口」とは赤山街道沿いの水路の水を新川の下を通して流すために作った穴が辰(龍)の口のようなことから言われる。この穴は龍が出てきた跡であるという伝説もある。

14 新川と岩槻道

6 辰ノ口

13 大間野中村家の長屋門

8 弁天社

9 「よしずや河岸」

11 縄文時代の丸木舟

10 旧綾瀬川跡

敷地内には主屋、長屋門、石蔵、土蔵が
な建築技法で
限り再利用して

綾瀬川は埼玉郡と足立郡の郡境に流れる川
ています。

1:9,000